

【表現学関連分野の研究動向】

日本語文法(史的研究)

富岡 宏太

今期も多くの研究が発表された。その中からいくつか述べる。副題は省略する。

はじめに、川瀬卓『副詞から見た日本語文法史』(ひつじ書房)を挙げる。副詞の統語的変遷や文法的意味の分化のほか、配慮表現など、歴史語用論への言及もあり、同氏の研究がいかに多角的になされてきたかがわかる。地域差への考慮が手厚いのも特徴である。地域差に関しては、森勇太「近世後期洒落本に見る丁寧語の運用とその地域差」(『日本語文法』23-1)も重要である。丁寧語使用の地域差を示し、特に江戸語では標準語としての性格を帯びることが影響しているとする。

文体やジャンルの違いを考慮に入れて通時的変遷を追う論もいくつか見られた。代表として2件を挙げる。北崎勇帆「不定語疑問文の主題化」の歴史は、「なぜなら」「なぜかといえば」といった疑問節を埋め込む表現が、元々は和文体に見られず漢文訓読体の表現であったことを示す。そのうえで、当該表現の歴史の変遷を、多様な資料を適切に扱いながら明らかにする。文から文相当句へという流れの中にある言語事象が、また1つ、詳らかにされた点でも大きい。菊地そのみ「〈付帯状況〉を表す節における統語的制約の変化」(『日本語の研究』19-2)は、「おもて赤みて(=顔を赤らめて)」のように、古代語では「主語-自動詞」の構造、現代語では「目的語-他動詞」の構造をとる従属節の例について、韻文と散文とのジャンル差にも注意しながら通時的に調査し、論を進める。さらに、変化の背景として、日本語における「活格性の喪失」という大きな問題につながる可能性を示唆する。菊地自身が「可能性」と述べるように、更なる検証が必要であるが、事実の記述と体系への意識、両方のバランスが重要であることを再確認した。

上記のような、資料の文体やジャンルへの意識は、資料を使いこなせることが前提である。この点で重要なのが山本佐和子『抄物の言語と資料』(くろしお出版)である。同氏のこれまでの研究が一冊に収められているのもうれしいが、「[付録]抄物の利用法」には、通時の研究の中で抄物がやや軽視されている現状や、利用法が丁寧に記述されており、勉強になった。

副助詞に関わる論として、小柳智一「中古の副助詞「さへ」」(『国語と国文学』100-4)と、古田龍啓「中世のマデ」(『日本語の研究』19-2)があった。小柳は、類似の副助詞「だに」と対照して研究がされがちな「さへ」について、あえて、単体で見えていくことの必要性を示す。古田は、「まで」が「それなら諦めるまでだ」のように、文末用法を獲得する流れを、統語面や用法間の連続性から丁寧に論じる。

現代語との対照研究では、古川大悟「ベシの多義性の原理について」(『花園大学日本文学論究』15)が、現代語「はずだ」の枠組みを上代語「べし」に適応し、基本的意味を考える。「他言語」の枠組みを用いることで見えるものと見えなくなるものへの考慮が、これからの研究に求められると感じた。(群馬県立女子大学)